

『水墨絵の魅力』

公益社団法人 日本防犯設備協会 理事
アイホン株式会社 常務取締役 寺尾 浩典



この度、日本防犯設備協会の協会会報「防犯設備」のリレートークの執筆依頼があり今回寄稿させていただきました。

寄稿に当たりいろいろ悩んだのですが私の趣味について執筆させていただきます。

私の趣味の一つは水墨画を描くことです。

水墨画を趣味として描くようになったきっかけは私の祖父にあります。

私は愛媛県宇摩郡土居町出身（市町村合併前の住所で現在は四国中央市土居）で四人兄弟の長男として農家に生まれましたが、私が生まれた時には祖父は既に亡くなっています、写真と自画像でしか知る事が出来ませんでした。

その祖父が水墨画の先生を自宅に招き、共に生活をしながら水墨画を習っておりました。その関係で家には先生や祖父の作品や練習で描いた水墨画が沢山あり、子供の時から良く水墨画を見ていました。その作品は草花（竹、水仙、菖蒲）、果物（葡萄）、鳥（雀）、魚（鮎）、蟹などと一緒に達磨大師の禅画がありました。特に達磨大師の絵に惹かれ、自分で見様見真似で水墨画を描くようになりました。もともと墨の匂いが好きで、墨をゆっくり磨りながら墨の匂いを嗅ぐと気持ちがとても落ち着きます。

ちなみに祖父の先生の名前は「泰雲」、祖父は「雲仙」、私は二人の名前の1文字ずつ頂いて「泰仙」とし落款も作成しています。



泰雲先生の作品



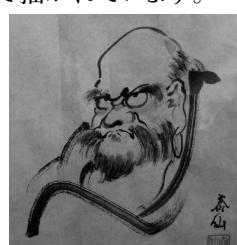
祖父雲仙の作品

高校卒業後は大阪の大学に行き貧乏学生で下宿生活をしていたのと、クラブ活動が忙しく水墨画を描く機会がめっきり減ってしまいました。また社会人になっても仕事と家庭の事が忙しく、なかなか描く余裕がなく水墨画のことも忘れていました。

ある日、日本経済新聞の広告欄に日本宗教画法学院生徒募集の広告があり、懐かしさと同時にいろいろ迷った末、その学院の通信教育に応募し、改めて水墨画を学ぶ事にしました。通信教育では達磨画講座で達磨大師の禅画を中心に描き、全国学院生禅書画大会にも応募し入賞することも出来ました。

達磨の禅画には全身達磨像、達磨半身像、達磨立像、達磨坐像、左向半身達磨像、右向半身達磨像、正座達磨像、面壁達磨像、起き上がり小法師などがあり縁起が良い物としていろいろな場面で描かれています。

水墨画を描く時は一発勝負なので最初の一筆でその絵の出来栄えが決まります。集中力と決断が必要です。特に達磨の場合は目が一番重要で、眼光鋭く目の玉一つで表情が全く変わってしまいます。達磨の意志の強さを現すには、口は大きく締まり鼻と口とが近くにくるように表現します。古来自分の握りこぶしが自分の口にいる人は豪快であると伝えられています。



私泰仙の作品

素晴らしい作品の達磨大師の目を凝視していると心底から慈悲心が伝わり意氣消沈していた我が身に活を与えてくれ、挫たり、くよくよした時ほどにらみ返して、自分を奮い立たせたくなるものです。

ここで水墨画について簡単に紹介いたします。

水墨画は黒一色の濃淡によって対象を描写する東洋独自の絵画で、日本における水墨画が本格的に描かれるようになったのは鎌倉時代に入って宋・元の水墨画法が移入されてからであります。その初期は禅宗と結びついて享受され黙庵(もくあん)、可翁(かおう)、明兆(みんちょう)、周文(しゅうぶん)、など画僧によって制作され「五山文学」注)の隆盛とともに「詩画軸」注)が大いに盛行し、雪舟の出現によって日本の水墨画の完成を見ることになります。

水墨画は世界最高の精神絵画で、画の大小より精神性が問われるのが水墨画の真髄であるといえます。

注)五山文学…鎌倉時代末期から室町時代にかけて禅宗寺院で行われた漢文学

注)詩画軸…「詩・書・画一体」の境地を表したもので画面上部の余白にその絵にちなんだ漢詩を書いた長い掛軸

次に水墨画の魅力についてご紹介します。

これはある文献に書かれていた内容ですが、私も凄く感銘したので紹介させていただきます。

水墨画は線の芸術と言われるよう、筆線は描く人によって千差万別な表情を見せます。生命力を感じさせる中に、清楚、率直、淡白、剛健、柔軟、質素など墨線には描き手の精神、人柄が表れます。

水墨画の味はにじみ、ぼかしの表情にあります。

墨はそのにじみぼかし具合によってさまざまな相貌を見せてくれます。

一般に墨に五彩ありという有名な言葉があり、にじみ、ぼかし、明暗、濃淡、諧調、調子によって墨一色で全宇宙を表現できるのです。

また、余白の美を楽しむのが水墨画のもう一つの魅力です。

水墨画の命は色彩の究極の黒と、鈍化された紙の白との絶妙なコントラストの美にあります。余白は見る人に多くのものを想像させ、無限の力と宇宙の広がりを感じさせてくれる墨の芸術です。

気韻生動が備わっているかが決め手となります。

気韻生動とは先に述べた3点の総合結果として、作品が氣高い風格や氣品が活き活きと表現され生命感を具備しているかが問われます。描き手の人間性・精神性が氣韻生物に集約されてくるといえます。

その後も年に数回達磨大師の禅画を描いていましたが、最近はゆっくり机に向かって墨を磨る時間がなく、水墨画を描く余裕がありませんでした。しかしこれからは時間を作りもう一度水墨画の勉強をしたいと思います。

今は気分転換に簡単に準備が出来る鉛筆で人物を描いています。鉛筆も墨と同じで黒一色でその濃淡により立体的に描く方法は一緒であり面白く魅力があります。

鉛筆はH・HB・B・2B・3B・4Bの6種類を使って描きます。

ただ残念ながら墨の匂いはしないので精神的な安らぎは得られません。

日本には四季があり春・夏・秋・冬とそれぞれの季節ごとに草花、生き物、
景色が違い水墨画を描くには恵まれた自然環境にあると思います。

美しき日本! 素晴らしき日本人!

皆様も一度水墨画にチャレンジする事をお奨めいたします。



鉛筆自画像